和化漢文資料における時の表現に関わる動詞の用法について

――至（いたる）入（いる）及（およぶ）臨（のぞむ）の使用差から――

磯貝淳一

【キーワード】動詞の用法・和化漢文の分類・仏教説話・霊験記・仏家と俗家

はじめに

和化漢文資料において、「時間の推移を表す表現」[1]で使用される動詞に次のようなものがある。

○次発誓願誦法花経、至于天暁、一部誦訖、（大日本国法華経験記・94 4）

○時于白月十五日、入夜秦主后妃王母綵女、並在翻経舘傍浄室中、（探要法花験記・上6ウ1）

○一日一夜不動、如入禅定、衆皆異之、即及暁更開眼悲涕、（探要法花験記・上20オ8）

○于時有要事、臨夜景出京、（探要法花験記・下2ウ10）

これら動詞の使用が和文・漢文訓読文・変体漢文の各文体範疇に関わって異なる様相を示すことは、夙に峰岸明氏の指摘によって知られるところである。峰岸氏は、和漢混淆文における時間の推移を表す表現「秉燭に及びて」の源流が古記録の文字使用にあること、時間（特に時刻）の推移を表す表現に関わる動詞の漢字表記に「及」字を使用することが記録語文の特色をなすことを明らかにされた。[2]

さて、これら「時の表現に関わる動詞」は、先に挙げた如く古記録以外の文章にも見出されるのであって、仏教説話・霊験記・往生伝等の和化漢文資料では、古記録類とは異なった動詞の使用を行う資料が存することが分かる。本稿では、様々な文章群が存する和化漢文資料相互の関係性を、用語の観点から捉える指標を得るべく、主として平安時代後半期成立にかかる和化漢文資料[3]を対象に、当該表現に関わる動詞の使用を纏める。更に、和化漢文資料中に見られる用語の差異について、和漢混淆文との関わりからその背景を探ることとする。

一、和化漢文資料における時の表現に関わる動詞の使用

始めに、「時の表現に関わる動詞」が格助詞「に」を介して受ける名詞[4]の種類（時間・年月・年齢・期間）を観点として分類を行った。この結果をまとめたのが表1である。

表1　時の表現に関わる動詞の使用

資料	語	時間	年月	年齢	期間	合計
注好選	臨	2	1			3
	及			1		1
	入					0
	至	3	3	5		11
探要法花験記	臨	2		5	7	
	及	4	1	5	10	
	入	2			2	
	至	11	22	2	35	
大日本国法華経験記	臨	7	11	9	27	
	及	3	4	11	22	
	入	3			3	
	至	17	11	12	40	
高野山往生伝	臨		1		1	
	及	5		2	8	
	入				0	
	至	3	4	4	11	
拾遺往生伝	臨		1	1	1	
	及	9	3	5	7	24
	入	1			1	
	至	9	7	13	29	

資料	語	時間	年月	年齢	期間	合計
続本朝往生伝	臨					0
	及		1	1		2
	入					0
	至			1		1
高山寺本古往来	臨		1	1		1
	及		1	2	2	5
	入	1				1
	至		3	2		5
雲州往来	臨		1			1
	及	3	2	2		7
	入					0
	至		1	1		2
御堂関白記	臨	1	1		1	2
	及	4	1	2		8
	入	165				165
	至		3			3
水左記	臨	36			4	36
	及	45	8			57
	入	182				182
	至		11			11
帥記	臨	28	5	1		34
	及	44	2			46
	入	48				48
	至	3	12			15
後二條師通記	臨					0
	及	8			1	9
	入	39				39
	至	1				1

全体を概観すると、調査対象とした12の和化漢文資料において、当該の動詞として、主に使用されるのは「至」「入」「及」「臨」の4語であることが分かる。(5)

ここで、これらの4語がそれぞれどのような日本語と結び付いて使用されているかを、古辞書の記述（特に色葉字類抄上位掲出字を中心に）を参考に確認しておく。

至

至〈イタル〉臻〈致又イタス〉輸又イタス出也／應ー不ー也（72字略）及矼予伋恤自逝傳以上至也　（前田本色葉字類抄　上10オ5・辞字）

＊他に「ヨシ（善etc）73字目／86字中」「ヨシ（由etc）6字目／7字中」に掲出あり。

至　脂利反　イタル／ムネ　シケ(上濁)シ(上)　ヨシ　禾シ(平)　（観智院本類聚名義抄　仏上75・2）

入

入イ(上)ル(平)／ー中納献ー〈容ー身内委襲（15字略）已上同　（前田本色葉字類抄　上9ウ4・辞字）

入ハ(上)ム(平)　（前田本色葉字類抄　上29オ4・辞字）

＊他に「ヨリ・ヨル（依etc）32字目／71字中」「シム（染etc）5字目／5字中」「シタカフ（随etc）10字目／52字中」に掲出あり。

入　如立反　イ(上)ル(平)　ハ(上)ム(平)／決、　シ(上)ム(平)　禾ニフ　（観智院本類聚名義抄　僧下109・7）

及

及〈ヲヨフ〉逮〈タイ〉暨被覃迄殆（14字略）已上同　（前田本色葉字類抄　上83ウ4・辞字）

＊他に「イタル（至etc）79字目／86字中」「ト（與etc）3字目／5字中」「オフ（追etc）10字目／11字中」に掲出あり。

及　渠立反　オ(上)ヨ(上)フ(平濁)　ト(上)シ(上)ク(平)　ツ(上)ヒ(上)ニ(上)　イカ、／カヘス　イ(上)タ(上)ル　禾義フ　（観智院本類聚名義抄　僧中52・1）

臨

望至放反／ノゾム／ー上臨力尋反／光ー／照ー／ー下莅云刈／ー覧（12字略）已上同　（黒川本色葉字類抄　中60オ5・辞字）

＊他に「コシラフ（誘etc）5字目／7字中」「キタル（来etc）4字目／10字中」に掲出あり。

臨　俗正　亠林　ノ(上)ゾ(上濁)ム　ム(上)カ(上)フ／ミル　ナ(上)ク(上)　カ(上)ナ(上)シフ　（観智院本類聚名義抄　僧下76・3）

古辞書の記述は右に示す通りである。特に『色葉字類抄』上位掲出字からは「至・入・及・臨」の4字がそれぞれ「イタル・イル・オヨブ・ノゾム」の表記に供された漢字である蓋然性が高いことが確認されよう。(6)

続いて、それぞれの動詞がどのように使用されているかを、

具体的な時間の記述に基づいて明らかにする。

Ⅰ　時間

①此学生居家学書、敢无伴侶、飲食難得、従旦至于暮結帯七分、以帯為力、（注好選・上12オ4）

②晴、及秉燭於左府有和歌事、（水左記・承保2年9月13日）

③大納言殿入夜参宇治給、（水左記・康平7年11月23日）

④臨天暁時、翁還来、（大日本国法華経験記・下128 7）

この類は、一日の内の区分を表すものである。時間の他、昼夜等の表現も含む。いずれも「（時刻が移って）ある時になる」という意の「一日の内の時刻の推移を表す表現」において各動詞が使用されていることが分かる。特に、

⑤十一日癸未　至于巳刻雨下、（帥記・寛治2年11月11日）

⑥廿六日　天晴、入暮景、暗雲籠天、（水左記・康平7年6月26日条裏書）

⑦十二日己丑　雨、及午時止、（水左記・承暦元年8月12日）

⑧十六日壬午　天陰雨降、臨午後雨晴、（水左記・康平7年4月16日）

⑨相次土佐守清長朝臣来、相遇謝遣、及秉燭前兵衛佐長兼朝臣来、（水左記・承暦元年9月23日）

⑩西剋許遠江前司為房来、令人謝遣、臨深更三位侍従被来、相遇謝遣、（水左記・承暦4年5月14日）

等の類似文脈において「至」「入」「及」「臨」各動詞が通用して使用される例が多く認められることから、これら動詞は、類義の関係に支えられて使用されていると考えられる。

続いてこれらが具体的にどのような名詞を受けるか、その異なりを以下に示す。

至（全47例）　暁 亥剋 丑時 丑時計 午剋 暁更 暁明 暮 鶏報 鶏鳴 昏黒 三更 天暁 天暁明 天暁時 寅剋 子剋 晩 未始 巳刻 巳時 夜半 夜半時 夜分 夜三更

入（全441例）　暮景 夜 夜更

及（全125例）　暁 戌刻 亥終 亥時 亥初 卯 卯刻 丑剋 丑刻 午時 暁更 暮 鶏鳴 黄昏 午後 昏 昏黒 申 申剋 申刻 申時 三更 三半 衝黒 深更 辰剋 酉 酉刻 子剋 子刻 巳 巳剋 巳刻 巳時 晩 晩景 晩更 晩頭 未刻 秉燭 暮景 夜半時 夕方 夜

臨（全76例）　黄昏 昏 昏黒 申刻 衝黒 深更 天暁時 酉 晩 晩景 晩頭 日暮時 秉燭 夜陰 夜景 夜半 夕 夜

「入」の使用が最も多く441例を数える。ところが他の三つの動詞とは異なり「入」は全441例中「暮景1（水左記）」「夜更2（帥記）」以外総てが「夜」を受ける例であり、慣用表現「入夜」として専用に使用されるものと考えられる。他の動詞については、受ける名詞に広いバリエーションが見られ、名詞の種類からは用法上特に弁別すべき差異は認められない。(7)

Ⅱ　年月

①嘉保三年正月廿八日、俄小労、送両三日、至二月朔日、法花

四

経一部。不動尊一万体、摺模供養矣、　（拾遺往生伝・上113）

②令成尋修法花法、及於七日、猶無其験、

（拾遺往生伝・7オ6）

③此人母无筍不食、臨冬時雪高寒厳筍尤難得

（注好選・上15ウ4）

この類は、年月日等、具体的な期日を表すものである。季節や「今日・明日・今」等現在を起点として表される期日及び時点も含む。いずれも「ある期日・時点になる」意を表す。

至（全77例）　秋時　五日　今　延暦四年　会期　晦日　彼期　来廿六日　来三日　来四日　元嘉九年　期　刻限　五七日　今年　此時　今度　四月廿三日　四月四日　七々日　十一月　十五日　十二日　十八日　十四日　貞観末年　焼身日　初夜時　承和二年　食時　宋孝建年中　宋元嘉末　其期　第四日　第七日　大明四年　大明七年四月八日　第六夜　同七年　冬　当日　同十八日　中夜　七日　二月朔日　廿一日　年限　明旦　明日　明朝　明年二月　明年春正月　約期　六月二十四日　来月六日　六年

入（全0例）

及（全23例）　今　晦日　彼期　件刻限　寒月　後夜　今夜　歳末　三年[8]　七八日　十一月　除夜　誕育夜　時　七日　廿七年　明春　明日

臨（全21例）　期　窮冬末　供養時　此時　後夜　焼身時　夏　冬時

「至」が他に比して多くの名詞を受ける事が分かる。このことは、以下に掲げる如き「自（従）～至～」「至今（者）」の定型表現の例が「至」に特徴的に見られることに要因があると考えられる。[9]

④自今日至于来四日物忌也、　（水左記・承暦元年8月1日）

⑤依之我等従朝至于今、乍捧供養不能来也

（大日本国法華経験記・上338）

⑥石田殿北已焼了、至今者定皆悉焼候歟者、

（帥記・永保元年6月9日）

⑦日景已暮、至今雖参無益歟、　（帥記・永保元年11月23日）

Ⅲ　年齢

①今生又至于八十不議頭病況余病乎　（注好選・中22ウ5）

②乃至年老及八十余、観余命無幾

（大日本国法華経験記・上165）

③即臨命終誦法花経提婆品、一心作礼結定印、向西方而即世矣、

（探要法花験記・上21ウ3）

この類は、年齢や一生の内のある時点・状態を表すものである。いずれも「ある年・時期になる」意を表す。

至（全40例）　過半　三才　死時　四十　終焉之時　終時　十二歳　十才　生年八歳　成仏時　知命時　廿五歳　八十　臨終　臨終時　老老今　老死　老年

入（全0例）

及（全31例）　九十　最後　盛年　死期　終年　十歳　中年　七歳　二三歳　二十　年齢八十四　八十余年　暮年　四歳　臨終　臨終時　老後

老剋　老年　老年九十

臨（全16例）　最後　最後時　盛年時　死期　遷化時　頽齢　知命時　命終　命終時　老　老後　老爛

Ⅳ　期間

①人跡不通、及数十日、殆可飢死、（大日本国法華経験記・中753）

②疱瘡之後痢病已及数十日云々、（水左記・承暦元年9月13日）

③然間雖及数刻其使不帰、（水左記・永保元年9月15日）

この類は、ある一定の期間を表すものである。いずれも「ある長さの時が満ちる」意を表す。

至（全0例）

入（全0例）

及（全20例）　数刻　数日　数十日　数月　数年　多日　多年　長年時　両三年　両三日

臨（全0例）

「期間」を表す名詞を受けるのは「及」のみである。

以上、格助詞「に」を介して受ける名詞の分類を手掛かりとして、「時の表現に関わる動詞」の意味用法の概観を行った。その結果、

a時間・年月・年齢の各用法においては「至」「入」「及」「臨」がそれぞれ類似の意味を担い使用される。このことは、各動詞が具体的に承ける名詞が共通するものが多く見られることより確認された。但し、「入」は「入夜（夜に入る）」という慣用的表現に使用される場合が殆どである。

b期間の用法は「及」にのみ存する。

の如き様相が大凡ながら確認されたかと思う。

「及」に「期間」を表す名詞を受け「ある一定の間」を表す用法が存する点以外は、意味用法上の取り立てるべき差異は認めがたい。しかし、ここで表1の各資料における動詞の使用状況に注目すると、資料により異なった様相を示す場合が存することに気付く。

全体を概観すると、動詞の使用度数において、資料毎にかなりの違いがあることが看取される。先ず、「入」は用法が固定化しており、他の語との比較に供するには適さないと考え、これを除外する。残りの「至」「及」「臨」の3語は、詳細に検討を加えれば違いが存するものの、類似の文脈において使用が認められるなど意味・用法それぞれにおいて近似している。これらの語の使い分けは、意味・用法以外に求められると考えられる。3語の使用率を計上すると以下のようになる。（「至」「及」「臨」の合計から、各字の使用率（%）を求めた。）

注好選	至 73.3	臨 20.0	及 6.7
探要法花験記	至 67.3	及 19.2	臨 13.5
大日本国法華経験記	至 44.9	臨 30.3	及 24.7

六

高野山往生伝	至 55.0	及 44.0	臨 5.0
拾遺往生伝	至 53.7	及 44.4	臨 3.5
続本朝往生伝	及 66.7	至 33.3	
高山寺本古往来	至 45.5	及 45.5	臨 9.1
雲州往来	及 70.0	至 20.0	臨 10.0
御堂関白記	及 61.5	至 23.1	臨 15.4
水左記	及 54.8	臨 34.6	至 10.6
帥記	及 48.4	臨 35.8	至 15.8
後二條師通記	及 90.0	至 10.0	

この結果に基づいて、時の表現に関わる動詞の使用と資料との関係を見ると、

○「至」を主用、「及」「臨」が従の使用

注好選・探要法花験記・大日本国法華経験記

○「及」を主用、「至」「臨」が従の使用

続本朝往生伝・雲州往来・御堂関白記・水左記・帥記・後二條師通記[10]

○「至」「及」を主用、「臨」が従の使用

高野山往生伝・拾遺往生伝・高山寺本古往来

に大別されようかと思う。大凡、仏教説話・霊験記の類が「至」中心的に使用する・古記録が「及」を中心的に使用する・往生伝が両者の中間的使用をするという傾向が看取される。古往来2種については、それぞれに類似の傾向を認めない。

しかし、これは先の表1での分類を捨象し、単純に時の表現に関わる動詞の使用度数から帰納される結果であって、動詞と結びついた各表現の有無が影響を及ぼしていることは言うまでもない。そこで先の分類についてそれぞれに動詞との関わりを見ると次の点に気付く。

「時間」を表す名詞を受ける動詞について、古記録では殆ど認められない「至」の使用[11]が、注好選・3例（「時間」における動詞の60.0％）、探要法花験記11例（同57.9％）、大日本国法華経験記17例（同56.7％）と、仏教説話・霊験記の類において少なからぬ割合で認められる。古記録において「至」は先に「Ⅱ　年月」の分類の用例④～⑦に掲げた如く「自（従）～至～」「至今（者）」の定型表現での使用が殆どであった[12]。

以上、時の表現に関わる動詞の使用から、和化漢文資料に3つの類別が可能であること。特に「時間」を表す名詞を受ける場合の主たる動詞が、仏教説話・霊験記の類（至）と古記録（及）とでは異なっていることが分かる。

二、「時の表現に関わる動詞」使用の差異について
―和漢混淆文との関わりから―

前項では、和化漢文資料において、「時間」を表す名詞を受けて「一日の内の時刻の推移を表す表現」の動詞の使用に差異が認められる実態を確認した。本項では、この差異が如何なる背

景に支えられて成立しているのかという問題について周辺資料との関わりから考えることとする。

動詞の使用の違いが和化漢文資料のどのような差異と対応するのかを確認する手段として、先ず和漢混淆文の説話資料において同様の調査を行った。和漢混淆文は、和文体、漢文（訓読）体に変体漢文体の用字・用語が様々に錯綜して形成されたものとされ、周辺の文体範疇との関わりが様々な言語事象に基づいて説明されてきている。[13] そこで、当該の動詞の使用がどのような文章と関わりを持つのかという問題を、説話という同一の文章群を用いて行おうとするものである。

表2　和漢混淆文における時の表現に関わる動詞の使用

資料	語	時間	年月	年齢	期間	合計
観智院本三宝絵詞	至	3	6	'	'	9
	入	'	'	'	'	0
	及	1	1	1	1	4
	臨	'	'	'	'	0
金沢文庫本仏教説話集	至	'	3	'	1	4
	入	'	'	'	'	0
	及	'	'	'	'	0
	臨	'	'	'	'	0
三教指帰注	至	'	1	'	'	1
	入	'	'	'	'	0
	及	'	'	'	'	0
	臨	'	'	'	'	0
法華百座聞書抄	至	1	'	'	'	1
	入	'	'	'	'	0
	及	'	'	'	'	0
	臨	'	'	'	'	0
古本説話集	至	'	1	'	'	1
	入	'	'	'	'	0
	及	'	'	'	'	0
	臨	'	'	'	'	0

対象としたのは、観智院本三宝絵詞・金沢文庫本仏教説話集・三教指帰注・法華百座聞書抄・打聞集・今昔物語集である（今昔物語集については、用例が多いため取り立てて別表とした）。これらの資料において時の表現に関わる動詞の調査を行った結果を示したのが表2及び3である。[14]

先ずは表2について、用例数は僅少であるものの「時間」「年月」において「至」の使用が認められる。これに対して「及」の使用は、三宝絵詞に存するのみである。[15]

続いて、今昔物語集における結果を示したものが表3である。表の上半分に各動詞の巻毎の使用数を、下半分にその動詞がどの用法において使用されるかを掲げた。

この表から、「至」と「及」とでは巻毎の使用に差異が看取される。「至」が全巻に渉って存し、比較の対象となる「時間」用法が多く見られるのに対し、「及」は巻七・十一・十三・十四・十六・十七・二十二・二十五・二十八に2～1例づつ見られるに止まる。しかも「時間」用法は3例を数えるのみである。「臨」も「至」同様、全巻に渉る使用が認められる。しかし、「時間」

表3　今昔物語集　時の表現に関わる動詞の使用

巻	至	入	及	臨	時の表現に使用される動詞と対象
1	7			2	至＝時間4・年月1・年齢2　臨＝年齢2
2	6			2	至＝時間4・年月1・年齢1　臨＝年齢2
3	1			3	至＝年齢1　臨＝年齢3
4	3	1		2	至＝年月2・年齢1　入＝時間1　臨＝時間1・年齢1
5	5				至＝年月5
6	15				至＝時間8・年月4・年齢2
7	11	1	2	3	至＝時間5・年月4・年齢2　入＝時間1　及＝時間2　臨＝時間1・年齢2
9	19	1		4	至＝時間2・年月15・年齢2　入＝時間1　臨＝時間1・年齢3
10	9			1	至＝時間6・年月3　臨＝年齢1
11	3		2	3	至＝時間2・年月1　及＝期間2　臨＝年齢3
12	5			6	至＝時間1・年月4　臨＝年月1・年齢5
13	13		2	14	至＝時間5・年月3・年齢5　及＝年齢2　臨＝時間1・年齢13
14	2	3	2	5	至＝時間1・期間1　入＝時間3　及＝年齢1・年月1　臨＝年齢5
15	15	3		26	至＝時間7・年月1・年齢5・期間2　入＝時間3　臨＝時間1・年齢25
16	2	2	1	1	至＝年月2　入＝時間2　及＝時間1　臨＝時間1
17	1	1	2	5	至＝年齢1　入＝時間1　及＝年齢1・期間1　臨＝年齢5
19	1	4		4	至＝年月1　入＝時間4　臨＝年齢4
20	3			3	至＝期間3　臨＝年齢3
22			1		及＝年齢1
23					
24	1	1		1	至＝年月1　入＝時間1　臨＝時間1
25	1		1		至＝年齢1　及＝年月1
26		3			入＝時間3
27		3			入＝時間3
28			1		及＝年齢1
29	1	1			至＝年月1　入＝時間1
30					
31	5				至＝年月5

用法を担うことは殆ど無く、

○遂ニ最後ノ時ニ臨テ（巻14第20話）

のように、臨終の場面に関わる表現に偏って使用される。

今昔物語集における「時の表現に関わる動詞」の使用は、「至」を中心になされることが知られる。[16] その用法に注目すると、巻二十二を境にその使用度数が少なくなっている。用法の内実もこの巻の周辺から、それまで中心であった「時間」用法が無くなり、「年月」「年齢」の用法のみに変化していることが分かる。

今昔物語集は、巻第二十までが天竺・震旦・本朝の仏教説話（含天竺、震旦世俗諸譚）、二十二以降が本朝の世俗説話から構成されている。つまり、漢文訓読調・変体漢文調の文体の影響が認められる[17]とされる部分において「至」が使用されることになる。古記録類において使用が多い「及」は、変体漢文の影響が認められるとされる本朝部前半（巻十一から二十）に僅かな使用を見るに止まる。

先に表2で見た「至」使用の実態と考え合わせると、今昔物語集における「時の表現に関わる動詞」の使用は、これら仏教説話類に近いと考えられる。冒頭に掲げた論文において峰岸氏は、時刻の推移を表す動詞「およぶ」の使用の実態から、

これら仏教説話集（今昔物語集・沙石集・打聞集・宝物集を指す　＊筆者注）と『平家物語』『古今著聞集』などで代表される一群の軍記物語・世俗説話集との間には、用語・語法などの上で、なおかなりの径庭の存することが看取されるのである。

との指摘をされている。今回の調査でも同様の結果が確認されたこととなる。元の問題に立ち返って、和化漢文資料における時の表現に関わる動詞の用法を考えると、仏教説話類（霊験記を含む）における「至」の中心的使用は、この種の文章群に特徴的な用法であるとの想定を行うことが可能となるように思われる。

三、仏教記録類における「時の表現に関わる動詞」の使用

和漢混淆文の調査を通じて「至」の使用と仏教説話類の文章との間に何らかの相関性が存することが分かった。ここでは、この「至」の使用が仏教漢文の世界においてどのような広がりにおいて認められるのか。その位置づけを考えたい。この問題解決に近づく一つの方法として、仏家の記録文たる仏教記録類[18]の調査を行うこととする。俗家側の古記録に相当する日常実用の文章との比較によって、取り立てる個々の言語事象の仏教漢文における位置づけを行うことが可能になると考えるからである。表4は調査結果を纏めたものである。

全体に用例数が僅少であり確定的な結論を導き出すことは難しい。永久五年祈雨日記の如き「至」の使用が見られる資料や、

表4　仏教記録類における時の表現に関わる動詞の使用

資料	語	時間	年月	年齢	期間	合計
永久五年祈雨日記	至	2	〃	〃	〃	2
	入	1	〃	〃	〃	1
	及	1	〃	〃	〃	1
	臨	〃	〃	〃	〃	0
普賢延命法日記	至	〃	7	〃	〃	7
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	〃	〃	〃	〃	0
	臨	〃	1	〃	〃	1
建久二年 普賢延命法日記	至	〃	1	〃	〃	1
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	〃	〃	〃	〃	0
	臨	1	1	〃	〃	2
文治二年 神宮大般若経転読記	至	1	2	〃	〃	3
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	6	〃	〃	〃	6
	臨	〃	2	〃	〃	2
入道親王尊快 御潅頂記	至	〃	1	〃	〃	1
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	〃	〃	〃	〃	0
	臨	〃	〃	〃	〃	0
中御室御潅頂記	至	〃	〃	〃	〃	0
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	1	〃	〃	〃	1
	臨	〃	〃	〃	〃	0
報恩院入壇資	至	〃	〃	〃	〃	0
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	1	〃	〃	〃	1
	臨	1	〃	〃	〃	1

資料	語	時間	年月	年齢	期間	合計
建暦三年 請雨法私日記	至	〃	〃	〃	〃	0
	入	2	〃	〃	〃	2
	及	1	〃	〃	〃	1
	臨	〃	〃	〃	〃	0
北院御室御日次記	至	〃	2	〃	〃	2
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	1	1	〃	〃	2
	臨	4	2	〃	〃	6
観音院結縁潅頂記	至	〃	〃	〃	〃	0
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	〃	1	〃	〃	1
	臨	〃	〃	〃	〃	0
仁隆法印入壇記	至	〃	〃	〃	〃	0
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	〃	〃	〃	〃	0
	臨	2	4	〃	〃	6
東寺結縁潅頂記	至	〃	〃	〃	〃	0
	入	〃	〃	〃	〃	0
	及	〃	〃	〃	〃	0
	臨	〃	1	〃	〃	1

文治二年神宮大般若経転読記の如き「及」の使用が大半を占める資料も存する。全体としては「至」18例・「及」13例・「臨」18例となり、この調査の範囲からは特に中心的に使用する動詞を認めがたい。しかしながら、先に調査を行った公家日記においては使用度数の多寡に基づく明確な用法の差異（「及」を中心的に使用する）が存していた。これに対して、仏家の記録文た

る仏教記録類には、古記録の場合と同様な様相は認め難いことが分かる。[19]

むすび

本稿では、和化漢文資料に見られる時の表現に関わる動詞について、その使用の記述を行った。その結果、「至（いたる）」「入（いる）」「及（およぶ）」「臨（のぞむ）」の各動詞は、「一日の内の時刻の推移を表す表現」において類義の関係性を有していることが確認された。しかし、説話・霊験記・往生伝・古記録の文章群の間で特に「時間」の用法に「至（いたる）」「及（およぶ）」のどちらを中心に用いるかという観点から、大きく[20]

「至」を中心に使用（「及」「臨」が従）＝仏教説話・霊験記

「及」を中心に使用（「至」「臨」が従）＝古記録

「至」「及」を中心に使用（「臨」が従）＝往生伝

の差異があることを指摘した。次いで、この差異を支える背景として、仏教説話類に特徴的な動詞の使用（用語）が存することが、和漢混淆文の調査を通じて明らかになった。

更に、付随して以下の点が新たな問題として設定された。

①今昔物語集を始めとする和漢混淆文における和化漢文資料の影響

今昔物語集の調査結果を承け、新たに本集における和化漢文資料の影響関係をより詳細な視点で捉えることが必要となることに気付く。それは、これまで先学によって明らかにされてきた、所謂変体漢文の本集に対する影響の問題は、多くが「古記録」を中心的資料として行われてきたものであり、それ以外の和化漢文資料との関係性は未だ明らかでない部分が存するということである。今回、和化漢文資料において「時の表現に関わる動詞」に「至」を中心に使用する資料が、仏教説話・霊験記の類であったことを考えると、「時の表現に関わる動詞」の使用に限っては、今昔物語集に対する古記録類の影響は少なく、寧ろ仏教説話・霊験記類の和化漢文資料に近い様相を示すという点が確認できた。周辺の和漢混淆文との関係と合わせ、今後より多くの視点からこの問題について考えていきたい。

②和化漢文資料における仏教記録類の位置づけ

公家日記である古記録は、日常の実用に資するという文章の特色から、和化漢文資料における公式の文章や文芸作品との比較が成され、その文体的特徴の解明、周辺ジャンルの文章に与えた影響の指摘などが行われてきた。この点、公家を中心とする俗家の和化漢文資料については、種々のジャンルに渉る考察が可能であった。しかし、仏家の文章においては、これまで古記録に類する資料が、少なくとも国語史学の分野においては利用されることが極めて少なかったと言えよう。

今回取り上げた「仏教記録類」は、詳細に追求しきれない部分を残したものの、古記録とは異なる動詞の使用を行う可能性

が指摘できた。この類の文章を検討し、和化漢文資料中に位置づけることで、これまで和化漢文資料群において空白の部分であった「仏家の日常実用文」の実態解明が可能となると考えられる。このことによって、例えば「表記主体の社会的属性の違いに関わる」種々の問題について、より確実な比較を行うことができると考える。

しかしながら、「日常実用」の概念規定が未だ明確ではない点[21]、仏家における漢文資料において「記録類」がどのような位置を占める資料であるのかという点等、今後解決すべき問題は多い。

注

(1)本稿では、「時間の推移を表す表現」を便宜上「時の表現」と呼ぶ。当該表現は狭義には、

①況人其夜不眠无記過失、故至于鶏鳴慎勿眠、（注好選・下29オ3）

②陰、時々微雨、臨晩景晴、（水左記・承暦4年5月15日）

③然間雖及数刻其使不帰、（水左記・永保元年9月15日）

の如く、「具体的な時間や期間についてその推移を表す表現」と考えることができる。しかし本稿では、以下の例のように「年齢」「ある時点における人間の状態」等をも含めて広く「時の表現」と認め、考察を進めることとする。

④年及十歳、登比叡山、（大日本国法華経験記・下82 10）

⑤臨老後始読法華経、（大日本国法華経験記・上5 13）

(2)峰岸明「秉燭に及びて」小考（『佐伯博士古稀記念國語學論集』所収、昭和四十四年）

(3)調査対象としたのは以下に示す資料である。

○注好選（『古代説話集注好選《原本影印并釈文》』）○大日本国法華経験記（『大日本国法花経験記校本・索引と研究』）○探要法花験記（『醍醐寺蔵探要法花験記』）○続本朝往生伝（『平安朝往生伝集』書陵部）○拾遺往生伝・高野山往生伝（日本思想大系『往生伝法華験記』）○雲州往来（『雲州往来享禄本研究と総索引』本文研究篇）○高山寺本古往来（高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来　表白集』）○御堂関白記（『陽明文庫蔵本御堂関白記自筆本総索引』（一））○水左記（増補史料大成『水左記永昌記』）○帥記（増補史料大成五『権記二　帥記』）○後二條師通記（大日本古記録『後二條師通記』上　自永保三年正月至寛治四年六月）○今昔物語集（日本古典文学大系『今昔物語集』一～五）○観智院本三宝絵詞（『諸本対照三宝絵集成』）○金沢文庫本仏教説話集（『金沢文庫本仏教説話集の研究』）○三教指帰注（『中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究』）○法華百座聞書抄（『法華百座聞書抄総索引』）○古本説話集（『古本説話集総索引』）○打聞集（『打聞集の研究と総索引』）○永久五年祈雨日記（東寺観智院蔵、紙焼写真を使用）○普賢延命法日記・建久二年普賢延命法日記・文治二年神宮大般若経転読記・

入道親王尊快御潅頂記・中御室御潅頂記・報恩院入壇資・建暦三年請雨法私日記（『続群書類従』釈家部所収）○北院御室御日次記・観音院結縁潅頂記・仁隆法印入壇資・東寺結縁潅頂記（『守覚法親王の儀礼世界―仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究―』所収）用例の引用に当たって、論旨に直接関係しない場合、用例に附された訓点はこれを省略した。また、解釈に資するため筆者が読点を私に付した場合がある。

(4)漢文に助詞「に」相当の表記が存するという意味ではない。ここでは、漢文の表記上には現れない日本語文としての助詞を指す。

(5)表題に掲げ、調査対象とした「至・入・及・臨」の四語の他、「成（なる）」も又「時の推移を表す動詞」として使用されることがある。

○刻限已成有節会事　（水左記・承保4年1月1日）

しかし、調査を行った和化漢文資料において、この動詞の使用は極稀であって比較に供するには適さないと見なし、対象から除外してある。「成（なる）」については、峰岸氏の注(2)論文に、仮名文学作品において時間の推移を表す表現に多く使用される動詞である旨指摘がある。

(6)『色葉字類抄』は、人事・辞字両門において最上位又はそれに準ずる掲出の漢字が定訓に対する常用の漢字として認められることが明らかにされている（峰岸明「三巻本色葉字類抄」人事・辞字両部所収漢字の性格について（上・中・下）『横浜国立大学人文紀要（語学・文学）』一九八七）。

(7)この点をより具体的に確認するため、名詞が具体的に表す時間と動詞との関わりの調査を行った。以下に掲げた表は、一日の時刻を横軸に取り、各語と結びつく名詞がどの時間に当たるかの目安を示したものである。調査は水左記を対象として行った。

	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
	0	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22
	前午					後午						
至						巳刻1	午時1	未始1			昏黒1	
入	深更1								秉燭180		暮景1	
及	深更5	鶏鳴2		暁更6			午時1	午後1		秉燭24 日没1	暮景1 戌刻1	亥初1
臨	深更6 夜半1		暁3					午後2		黄昏1 秉燭3 昏1	昏黒1 晩2 夜5 晩景2	晩頭4

＊帥記　＊後二篠師通記　＊帥記　＊帥記

「入」が「夜」と集中的に対応する他「及」「臨」については全体にばらつきがあり特定の動詞に時間を表す名詞が結びつく様相は認めがたいようである。更に先に意味の記述より「時間の推移」を表す意味において近い用法を持つとした「至」と「及」とについては、水左記に当該用法を示す「至」が存しないため、この比較を行うことができない。そこで、当該用法の「至」が認められる他の古記録の例を網掛けによって示している。用例数が僅少であるため明確な判断を下すことはできない。しかし「及」が午後から夜半にかけての時間を表す語との結び付きにやや集中する傾向が見えるのに対して、「至」はこの時間帯の名詞との結び付きが強いとは言い難いようである。今後、対象とする資料を広げて調査を行うこととしたい。

(8)後の「期間」における帰納からは、「及」に「ある一定の期間を表す名詞を受ける」用法が特徴的に存していることが分かる。このことから「三年」「十一月」「七日」等の「年月」の名詞を「及」が受ける場合、各名詞が「ある一時点」を表すのではなく、「三年間」「十一ヶ月間」「七日間」といった「一定期間」を表すとも解し得る。しかし、「期間」の名詞の場合、「三四月」「数日」「両三日」等名詞自体が「期間」を表す点、以下に示す如く「及」で表される動詞句の直前に「時刻が一定期間の間で推移する」意を補う形で示す文章が存する点から、今回はこの分類を行った。

○時刻推移及秉燭退出、此間前土佐守清長朝臣来、
（水左記・承暦元年11月26日）

○此間時刻推移已及秉燭、
（水左記・承暦4年1月10日）

(9)峰岸氏注(2)論文に古記録において、時の表現に関わって「至」が使用される場合、大部分が「自（従）～至～」の定型表現となるとの指摘がある。

(10)後二條師通記には「至」の使用が認められないため、厳密には異なる分類となる。しかし、「及」の使用が主となる点から、この分類を行った。

(11)注(2)峰岸論文に詳しい。

(12)この「自（従）～至～」の定型表現において、大部分が「至」を使用する中にあって、「及」を使用する例が古記録に認められる点には注意を要する。

○従未時及戌時、二御読経有感応、又仁海御修善等所致也、
（御堂関白記・寛仁2年6月8日）

古記録の定型表現における「至」の使用が、「時間」における「及」の使用に影響を受けたものとも解し得る。しかし現時点ではこの問題を追求する材料を揃え得ていない。但し、かかる表現は、今回調査した資料中、古記録以外のものには見出せない上、僅かではあるが正格漢文を調査したところ（東大寺蔵地蔵十輪経・石山寺蔵大東西域記・興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝）、同様に類例を見なかった。この事象が記録体において生じた「和

化」と認められるのか、また和化漢文資料中にどのような範囲に渡って見られるものなのか等の問題については今後の課題としたい。

(13) 峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』（東京大学出版会、一九八六年二月）「第三部　記録語の周辺」に詳しい。

(14) 打聞集は、当該表現の用例が認められなかったため、表より除外してある。

(15) 仏教説話集の一群に時刻の推移を表す動詞「及」の用法が見られないことについては、峰岸明氏注(2)論文に既に指摘がある。

(16) 峰岸氏注(2)論文の注に「『今昔物語集』では、時刻の推移を示す表現に、「およぶ」に代わるべき動詞として「いたる」「なる」が主として使用されているが、両語の各巻における使用度数の分布は、動詞「いたる」「なる」のかかる用法をそれぞれ漢文訓読文・仮名文学語文のそれと見た場合、これまでの集の文体研究が明らかにして来た漢文訓読調・和文調の交替関係と同一の傾向を明瞭に示している」との指摘がある。

(17) 峰岸明「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について―「間」の用法をめぐって―」（『国語学』三六、一九五九年三月）

(18) 仏教記録中には様々な目的によって記された様々な形式の文章が存する。これを単純に一括して比較に供することは避けるべきであると考える。しかし、本発表においては説話等に対峙する極として「記録の文章」を想定し仮に比較を行った。今後仏教記録類の調査を進め、仏家の文章における位置づけ、更には和化漢文資料における位置づけを考えていきたい。また、この度用いた資料は大部分が『続群書類従』所収の本文を使用している。当該期の言語の実態を把握するためには古写本を用いた調査が必要不可欠となる。併せて今後の課題としておく。

(19) 明確な結論を導き得なかったが、今後調査の手を広げていくこととする。その際、仏教記録の中に俗家の儒者の手に成るものが存在していることにも注意を払い、この観点からの比較考察も行うこととする。今回の調査資料中、中御室御灌頂記は儒者である大江匡房の著作である。

(20) 古記録類については「雲州往来」が「及」中心、「高山寺本古往来」が「至」「及」中心となり、文章ジャンルとしての特性を導くには到らなかった。同一ジャンルにおける動詞の使用が分かれる問題については、両資料の編者固有の漢字使用の問題（編者の社会的属性等に関わる漢字使用）を考えることによって解決が可能であると考える。今後の課題としたい。

(21) 仏家と俗家とでは「日常実用」の内実が異なると考えられる。この異なるものを比較に供し得るのか、また「実用」の違いが用語・用字に及ぼす影響はあるのか否か、という点も問われなければならない。

Usage of the Temporal Verbs in 'Waka-Kanbun'

Junichi ISOGAI

The purpose of this paper is to compare a variety of kinds of documents written at latter term of the Heian era, and to research features among 'Waka-Kanbun'.

It tries to describe the difference of the usage of four verbs, "Itaru", "Iru", "Oyobu", and "Nozomu".

The conclusion is as follows.

1. The verb used frequently is different according to the genre of the document. (e.g. "Oyobu" in Kokiroku : "Itaru" in Bukkyo-setsuwa and Reigenki)
2. 'Bukkyo-setsuwa' and 'Reigenki' have a feature different from another, in the point which verb to select in the context.